

氏名	田代 櫻
ヨミガナ	タシロ サクラ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第7号
学位授与年月日	平成30年3月10日
学位論文題目	チェロ奏法におけるデュポールの奏法試論の重要性について

博士論文審査委員会	(主査)	教授	岡田 敦子 (ピアノ)
	(副査)	教授	フェイギン ドミトリー (チェロ)
	(副査)	教授	武石 みどり (音楽学)
	(副査)	教授	村田 千尋 (音楽学)
	(副査)		沼口 隆 (音楽学) (国立音楽大学准教授)

博士演奏等審査委員会	(主査)	教授	岡田 敦子 (ピアノ)
	(副査)	教授	フェイギン ドミトリー (チェロ)
	(副査)	教授	星 秀樹 (コントラバス)
	(副査)	教授	工藤 重典 (フルート)
	(副査)	教授	佐野 成宏 (声楽)
	(副査)	教授	藤原 豊 (作曲)
	(副査)	教授	武石 みどり (音楽学)
	(副査)		北本 秀樹 (チェロ) (桐朋学園大学非常勤講師)

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日 時	平成 30 年 2 月 14 日 (水) 13 時 00 分～15 時 30 分
場 所	東京音楽大学 J208
判 定	合
審査結果の要旨	<p>本論文は、今日でも広く用いられているデュポールの「エチュード Exercises」に、それに先立って「奏法試論 Essay」が付けられていたことに注目した点に独自の観点がある。「奏法試論」の理解を踏まえなければ「エチュード」の正確な理解ができないことが、当該論文の論証を通じて明らかになっており、演奏を専門とする者の博士論文にふさわしいと判定された。</p> <p>予備審査で指摘された論証手続きの不備などについては、同時代の奏法試論や教則本の多くに目を通し、デュポールの独自性と歴史的な位置づけを明らかにする手順を明確に示したことによって改善されている。</p> <p>ただし、巻末に付録として収めた本文第 10 章および第 18 章の対訳に不備があることをはじめ細かいミスが散見されるため、修正のうえ公開することとなった。</p>

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	平成 29 年 7 月 15 日（土）18 時 00 分～19 時 10 分
場 所	東京音楽大学 A 館 100 周年記念ホール
判 定	博士研究と関連して選曲されたベートーヴェンのチェロソナタ第 3 番、変奏曲 Wo0.46 とともに、シュニトケのソナタが演奏された。一部の審査員からベートーヴェンの音楽表現にさらなる説得力を求める声も出たが、リサイタル全体としては、博士号申請リサイタルに求められる演奏水準を満たしていると評価され、「合格」と判定した。
審査結果の要旨	<p>プログラムの後半になるにしたがって説得力のある演奏となっていたリサイタルだった。</p> <p>プログラムの前半に奏されたベートーヴェンのチェロソナタ第 3 番、および同じくベートーヴェンの《モーツァルトの「魔笛」から「恋を知る殿方には」の主題による変奏曲》は、博士研究に関連しての選曲である。</p> <p>ソナタ第 3 番に関しては、一定の水準の演奏ではあるものの、音楽の表現、とくに力強さや前に進む力に物足りなさが残ったという意見が一部の審査員から出された。2 曲目の《変奏曲》に入るあたりからチェロの音にも艶が増し、表現も多彩になり、美しい演奏であった。</p> <p>2 つ大きなソナタの間に、適度な長さの《変奏曲》を置いたのは、良いプログラミングだと評価できる。</p> <p>プログラムの後半に奏されたシュニトケのチェロソナタ第 1 番は、ピアニストの好演もあり、作品のもつ精神性の表現、それを支える技量ともに優れ、説得力のある演奏となった。</p> <p>配布プログラムに誤字が散見されたのは残念だったが、全体として博士課程における演奏面での進歩をよく示し、博士号申請のリサイタルとして認めることのできるものであった。</p>

以上